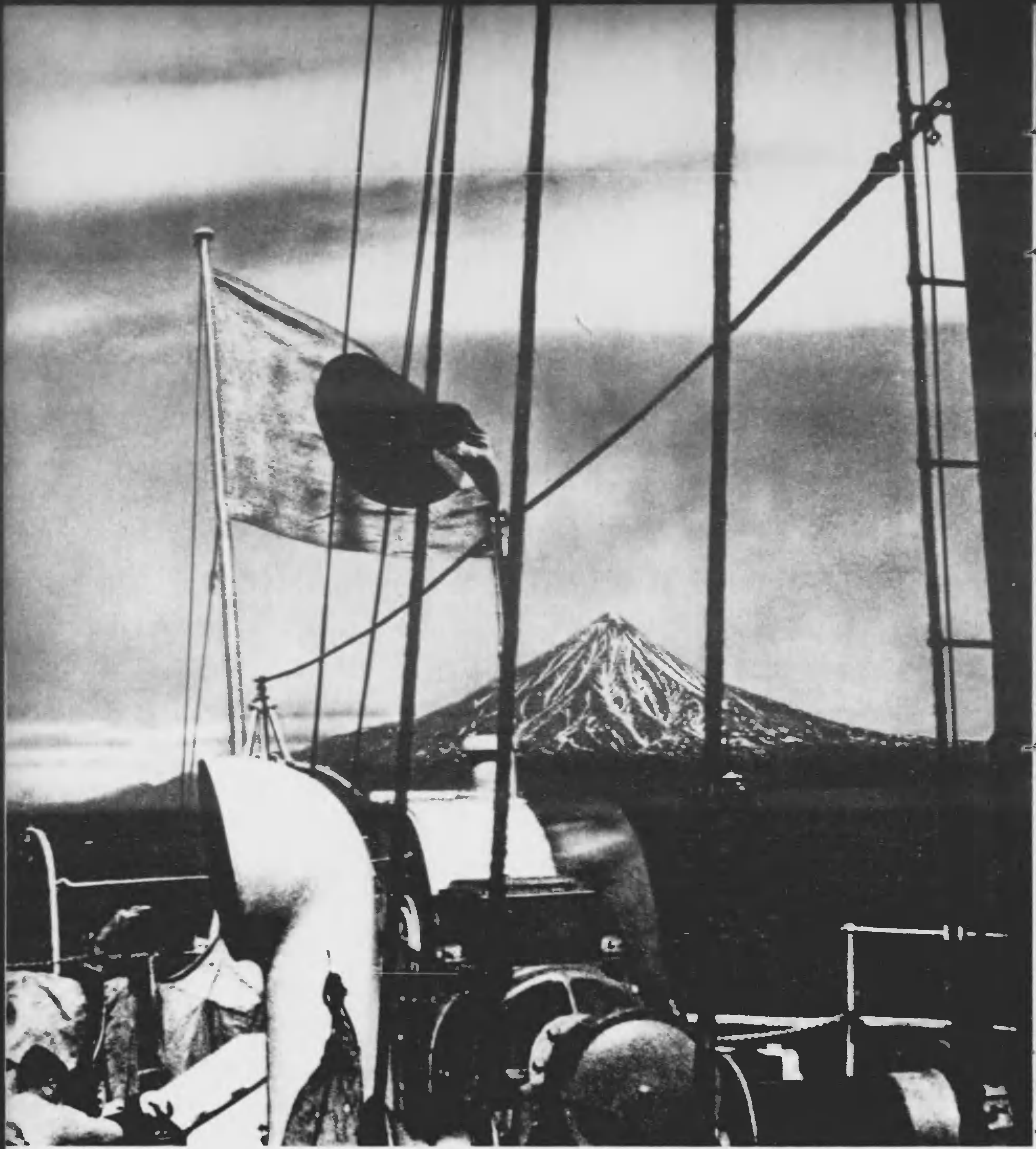
寫眞週報

内閣情報部編輯
八月十六日・第七十八號・十セン

昭和十三年二月十二日第三種郵便物認可　昭和十四年八月十六日發行（毎週一回水曜日發行）第七十八號

斷乎と守る北洋の權益



断乎と守る北洋の權益

ソ聯領カムチヤツカ東岸の濃霧は咫尺を辨ぜぬほど深い。その濃霧を突き破つてポツカリ浮き出たクロノツカヤ峯を見ることはごく稀である。

船尾に日の丸をはためかせる農林省の監視船快鳳丸は領海線にまで近づき「クロノツカヤが姿を現はしたら最後嵐がやつて來る」と漁夫達に厄病神扱ひされる山面を眺めたのである。

富士山より高いクロノツカヤの山ひだにはいまなほ殘雪も深く北國の面影を殘してゐる。

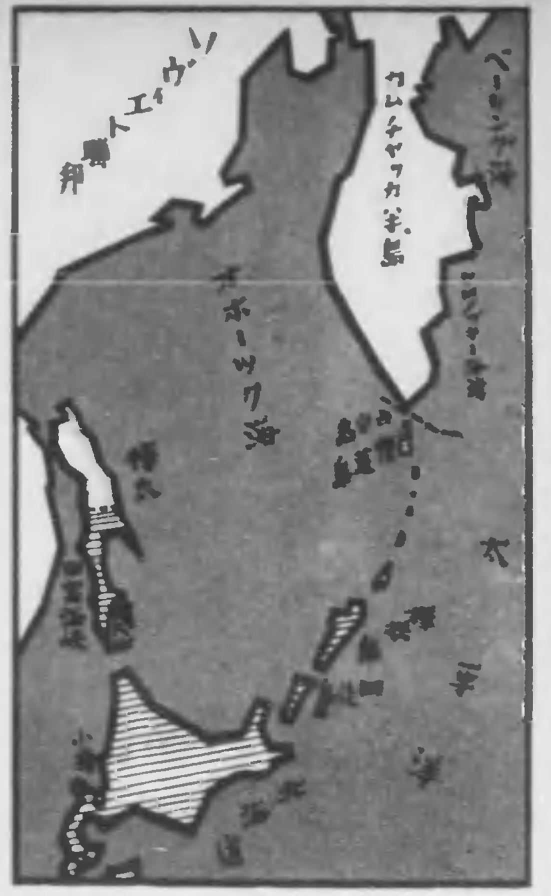
旅に求めよ日本の姿

悠久三千年
厳とかゞやく山や川
日の丸かざして
我等は行く
（大山にて）

鐵道省

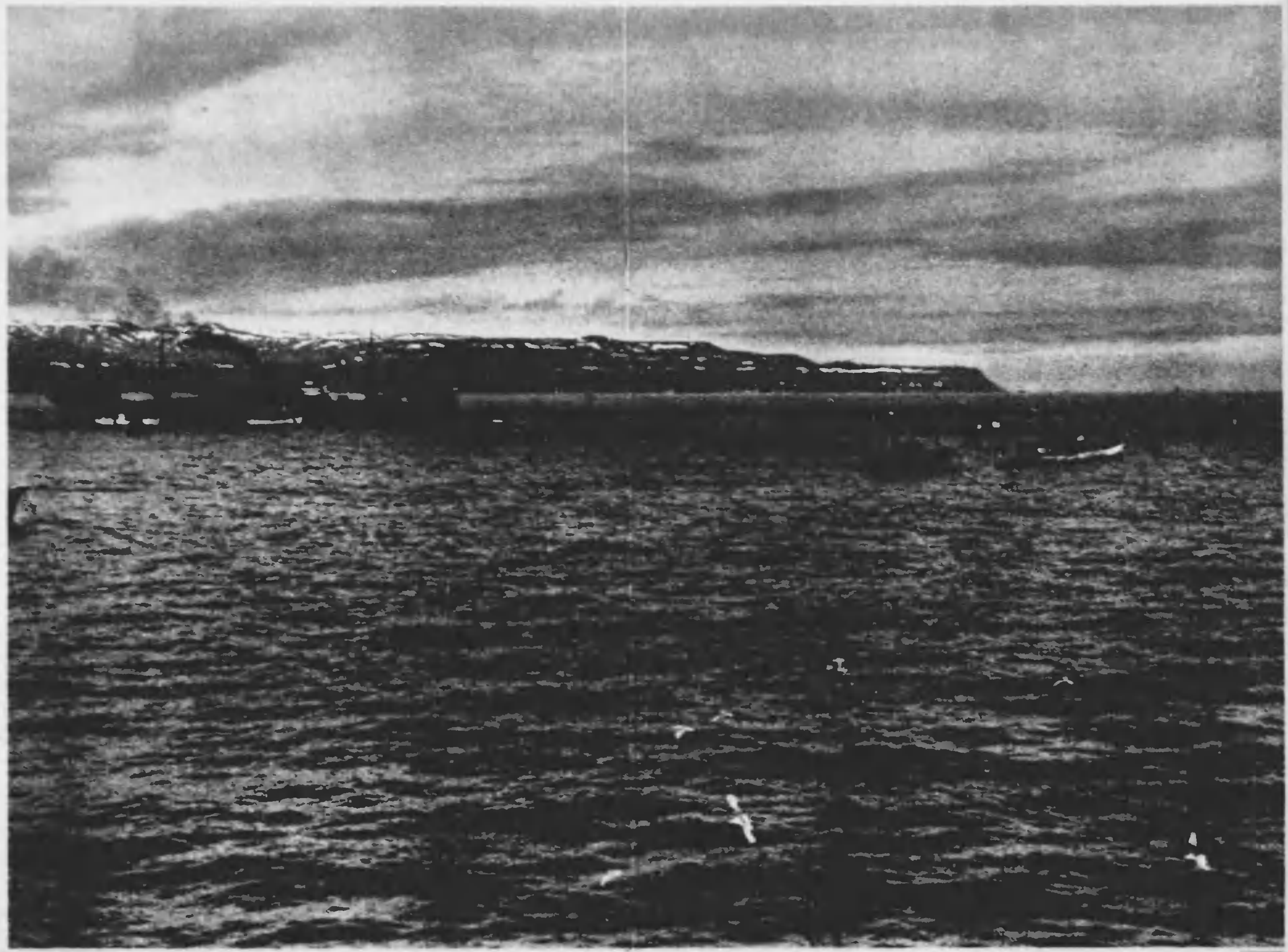
断乎と守る北洋の権益

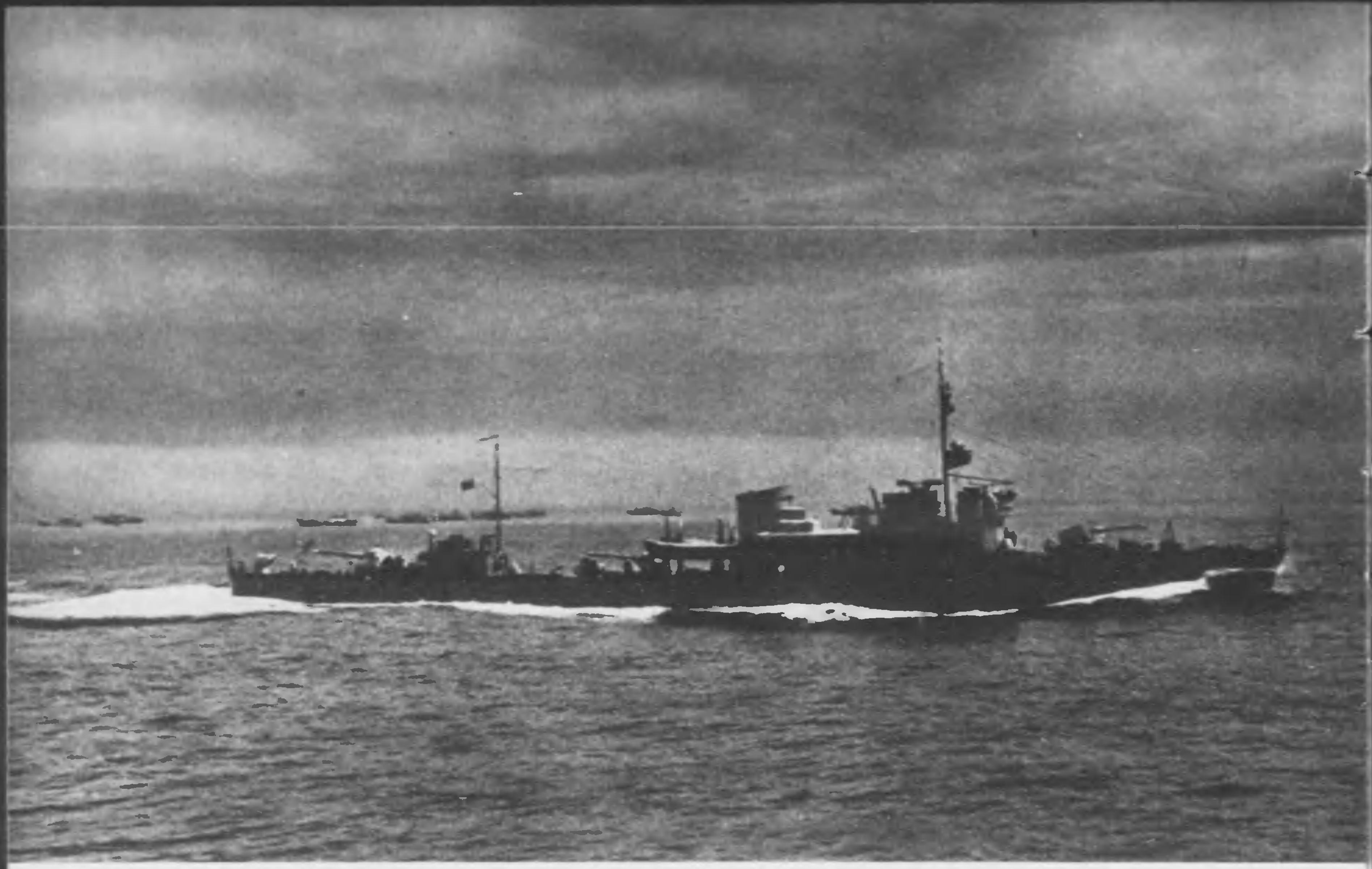
撮影　内閣情報部


ソヴィエト聯邦
カムチヤッカ半島
ベーリング海
オホーツク海
樺太
間宮海峡
太平洋
北海道

⇧公海で行ふ沖取漁業もソ聯の不法からいろ〳〵と問題を起す。

この無意味な紛争を避けるため北洋の荒海に独航船を手離した母船は小供船の帰りを望遠鏡で注視し黒板にいち〳〵書込んで帰りを待つ。





⇨ソ聯領カムチヤッカのコズロフ岬沖合三海里、天下の公海で鮭鱒の沖取に従事するわが漁船。一隻の母船を囲繞する独航船は今漁場に向つて母船を離れる。

⇧ソ聯駆逐艦キーロフは北洋の漁場に波濤を立てわが漁船に威嚇の態度を示す。

三機編隊のソ聯機はわが漁船の上をこれ見よがしに飛ぶ。飛行機まで動員するソ聯の漁場監視はまさに狂燥の極みである。⇩

北洋特有の濃霧が閉ささうが海が荒れようが独航船は勇躍漁場に向ふ。⇩

北の生命線 北洋漁業

日ソ漁業條約交渉は昨年秋から本年初頭にかけ、ソ聯邦の不法なる要求のため紛糾を重ね、漸く四月に至つて兎に角暫定協定の成立を見たことは周知の事であります。然し協定の成立が直ちに北洋漁業の安定と平和を齎すものではないことは、從來からソ聯邦の態度、交渉の經過に徴し充分豫想されたのでありますが、果して本年北洋の漁期開始と共にソ聯邦の我が權益漁業に對する妨害、壓迫は全面的計畫的に擴大し、或は漁場間の通信連絡運搬を目的とする所謂本部船の査證拒否、多數の漁場行幹部社員に對する渡航禁止、我が漁船の拿捕等の不法壓迫を始めとし、現に毎月漁場から報告されつつある作業妨害の事例は既に百を以て數へるやうな狀態にあるのであります。

北洋漁業の現狀は現在日ソ漁業條約に基く露領漁區漁業を中心に母船式蟹及鮭鱒漁業、北千島漁業と近年の躍進振りは非常に目覺ましく、此等漁獲物は鮭鱒罐詰、同鹽魚製品、蟹罐詰を合せて年產一億圓に上りその中五、六千萬圓を海外市場へ輸出し、時局下最も緊切な外貨取得上重大なる役割を演じてゐるのであります。毎年四月頃より九月へかけて此等北洋へ出漁する從業員數は四、五萬人の多きに上り、或はカムチヤッカ、北千島の陸場漁場に或は數千噸の海の工場ともいふべき母船に、或は、二、三十噸級の漁船上に、何れも三、四ケ月の漁業勞働をなし、縱横に北洋の漁場を馳驅して北洋第一線の守を固くしてゐるのでありまして、その勇敢な活躍は日本人ならでは決して行ひ得ないものとして世界の認むる所のもので、最も日本的性格の顯著な產業であります。

本年四月に成立した日ソ漁業條約暫定協定は本年一杯で期限が終了することになつてをり、本年末ともなればソ聯邦は昨年にも増して益々權益の縮減を企圖し來るでありませうが、我々はどこまでも既得權益を守るために斷乎として鬪つてゆきたいと思ひます。

露領水產組合
副組長 **田中丸祐厚**

⇧ 獨航船は毎日午後漁場に出かけ夕刻網を下して網の流れと共に夜明けを待つ。夜が白みかける午前二時頃になるとエンヤ〳〵と網をたくり上げる。その網目に首を突込んだ銀鱗に漁夫の喜びは湧く。

⇨ 公海で行ふ沖取漁業に對し、領海で行ふ陸場漁業がある。これはソ聯領のカムチヤッカ沿岸、北千島沿岸で行はれる。陸場漁業の網は流し網と建網の兩方を使用する。

⇧ 鮭、鱒の沖取は全部流し網で漁獲する。流し網は巾五間、長さは二浬から三浬位ある。これを川崎船、獨航船（二十トンから五十トン位）に積んで母船から二十浬三十浬の沖合に運び適當な漁場で寫眞のやうにともから流す。

⇦ 建網は定位置で岸近くから五千尺位網をはり、その先が兩側に袋網となつてゐる。この袋網に入つた鮭は漁夫のかけ聲とゝもと二隻の子船に手くられ漁獲される。

濃霧を衝いて

濃霧

六月×日

小樽を出帆してから一晝夜、今日も亦濃霧、濛々たる濃霧だ。船は今朝宗谷海峡をかはしてオホツク海を東北に向つて走つてゐるさうだが、自分には一向船が進んでゐるやうには思へない。尤もスエーターを着込む程の寒さになつたし、海圖の上に鉛筆で引かれたコースを見ても、船は時速七浬といふからさう信じなければならないのだが、自分にはどうしてもこの船が大きな綿のやうな濃霧の中にくるまつたまゝいつまでもぢつとしてゐるやうな氣がしてならない。

空も海も薄どんよりした鉛色で境はない。たゞ、波のうねりがほんの五十メートル位先までぼんやり見えるだけで、明けても暮れても何の變哲もない。いつまでも晴れぬ濃霧、何處へ行つても止まぬ單調な波のうねり、遠く聞える鈍い機關の音、鳴らしつゞける警笛、そろ／＼退屈も骨身にこたへてきた。船には絶對強いと公言した自信も怪しくなつてきたこれはいけないと思ひ出すと、船の搖れるのが愈々氣になり出した。頭が變になつてきた。

ふら／＼と室に入つてベットにもぐり込んでみたがフワ／＼としてどうもいけない。起上つて一番しつかりしてゐさうな机にかぢりついてみたがやつぱりいけない。このまゝ一週間も續けられてはやりきれない。あゝ、どつか搖れない動かない所へ行きたい。

〝お風呂をどうぞ〟とボーイにいはれて氣のすゝまぬまゝせまい湯槽の中に體を浮かした時アッと許り歡聲した。一週間振りに入つた風呂の氣持ちよさではない。ふうはりと湯につかつてゐるとこゝでは船の動搖が感じない。何處まで行つてもついてくるいやなゆれからはじめて脱れることの出來る所を發見したからだつた。

沖取漁場

六月×日

今日は目的地に着くらしい。風呂の中で悟りを開いてどうやら船醉ひだけはまぬがれたが、濃霧の中の一週間は長かつた。全くやれ／＼と思ふ。だが目的地につくといつても別に港に入港するわけではなく、太平洋の波の上で他の船に移乘するだけだと思ふと一寸心細い氣がする。

晝近く濃霧の中に一隻漁船が見えた。そして又一隻、それもすぐ濃霧の中に消えて又別の船が見える。又消える。警笛は引つきりなしに鳴らされる。すばらしい光景だ。ずつと近づいた漁船から手を振つてゐる漁夫の姿が見える。やがて本船がもたらす内地からの嬉しい便りは彼等の勞をいやすだらう。

船の數がふえたぞと思ふ次から次と霧の中から現はれてそれが段々ハツキリしてくる。思はず手の甲で大きく目をこすつてみる。永の眼病から救はれた思ひだ。おゝ、濃霧が晴れて來たのだ！

ゐる／＼！　數百の漁船が様々のホースで蒼い海面を蹴し、その向ふには大きな鮭鱒母船が悠然と煙を吐いてゐる。何といふ壯觀であらう。僅か數分の間に展開されたこのすばらしい光景には全く驚いたといふより他にいひ様がない。本船はその眞只中に割り込んでゆく。なるほど間違なく走つてゐる。見る見る工船に近づいてゆく。望遠鏡をとると船尾の船名が見える。司令船信濃丸だ。ボーボー向ふからもこちらからも歡びにふるへるやうに汽笛が鳴りつゞく。やがて信濃丸のマストにする／＼と信號旗が揚げられる。

〝エンロゴクロウ、アンチャクヲシュクス〟

こちらもこれに答へて

〝アリガトウ〟……

迎へのランチが近づいて誘導してくれる。本船はスピードを落してこれに從ひ、間もなく信濃丸の右舷近くに錨を降す。

すぐランチで信濃丸の舷側に横付し繩梯子を攀じのぼつて甲板に上る。さすがは海に浮く工場、微動だもしない。全く陸へ上つた思ひだ。

時に丁度正午、内地時間午前十時三十分、場所はカムチャッカの東海岸クロノツキー海灣のコズロフ沖合四浬、即ち北緯五十四度三十分、東經百六十一度四十分である。

挨拶をすまして當分の我が室に案内され、先づ内地へ安着の無電と賴信紙をとる。無電　信濃丸　おお、この船こそ曾ての日露の海戰に〝敵艦見ゆ〟の第一報を打電した殊勲者ではないか。そしてその戰ひでわが國はこの北洋の漁業權を獲得し、今こゝに堂々その權益を實行してゐるのだ。

私はもう一度甲板に出てみた。初島から熱海位に感ずる所に横はるカムチャッカの陸地はまばらの殘雪と新緑が美しい模様を畫いてゐる。その岩影や、入江にはソ聯の船もゐるだらう、ゲーペーウーの青い目も光つてゐるだらう、而もその沖合でのこの壯觀はどうだ。漁船は思ひ／＼の方角にポン／＼と勢よく走つて姿を消してゆく。

岸に最も近い所には農林省の監視船が眞白い姿を横たへてゐる。又はるか沖合には我が無敵海軍の〇〇が厳然とあたりを見守つてゐる。この力強い姿さへ見えれば我が海の子たちはもう何ものも恐れない。漁期四ケ月荒天に遭へば逃げ込む港もない。だが彼等は昂然としていふ。

〝戰爭に行つてゐる兵隊さんの事を思へば何でもない〟曾て皇軍勇士の貴い血潮によつて得られた此の權益を今彼等は生命にかけて守つてゐるのだ。

獨航船

七月×日

今日は和ぎもいゝし魚の情況もよささうだからといふので沖の流網の撮影に出かける。午前十一時早目に晝食をすまして會社所屬の獨航船菊丸（五十噸）に乘る。なるほどお天氣はよささうだ。波も靜かだ。十二時過ぎ出帆、南東へ向けて時速九浬の速さで走つてゆく。

三十分も走つたかと思ふ頃雲が少し擴づてきた。波も少し出てきたやうだ。まゝよ、少し横にならうと思つて船尾の小さな室へ入る。棚のやうなベッドはあるがまるで倉庫だ。酒、味噌、醤油、荷物、浮庵の桶等が所せまいまでに置いてある。一種特別な船の匂と浮庵の匂が何ともいへない匂となつて鼻をつく。窓を明けると寒い。船の動搖がはげしくなつてきた。もう起きてもゐられない。大變な所へ來たと後悔したがもう追つかない。

夕食の知らせを受けて室外へ出た時は今朝の天氣はどこへやら完全な暴風である。歩かうにも歩けない。猛り狂ふ波は咬みつくやうに頭の上へのしかゝつてくる。やつとの思ひで船底の室へ降りると、ストーブの熱氣と機關の油の匂がむつとくる。二疊敷位の天井に頭はつかへるがやつと坐れる所があつて飯臺が置いてある。膝を突合せるやうにして漁夫たちと飯臺をかこんで坐る。食慾は無いが元氣を出して食ふ。

茶碗を置くと、船が物凄く搖れるので茶碗が飯臺のこちらから向ふの端まですべつてゆく。汁椀はひつくりかへる。一杯をやつとの思ひで食ふ。

午后六時半、目的の場所へ着、直ちに投網が開始された。北緯五十一度十六分、東經百五十八度四十六分、氣温九度、水温七度、潮流南といふ情況の下に、逞しい漁夫たちは岸から四十浬の太平洋の荒濤の中で百二十反の網を流してゆく。船は片舷が水面とすれ／＼に傾く。船首が半分波の山へもぐり込む。濤と人の物凄い闘爭である。柱にしがみつき、しぶきを體でかばひながらカメラを向ける。

投網を終つたのが午后八時半、まだ日は暮れない。明日は午前三時揚網だといふ。船はそれまで網と共に荒天と戰ふのだ。

横になつてみたがとても眠れさうにない。頭がすつと下つて足が持ち上つたかと思ふといやといふほど床に叩きつけられる。暗黒、怒號する北洋の荒浪、母船まで三十浬、逃げ込む港は無い、海の民だ、男だと幾度か心にいひ聞かせながらも大自然の猛威に魂の底まで威嚇される氣がする。漁夫たちは眠つたらしい。彼等は故郷を出て二月、そして後二月、この船から一歩も出ないのだ。風呂等勿論入らない。顔を洗ふ水さへ不自由なのだ。

七月×日

午前三時、もう外は明るい。波はいくらか和いだやうだ。頭が變に重くて、體の中心を失つたやうで起上れない。ふら／＼とそれでもカメラだけは抱へこんで外に出てみると、漁夫たちは驚く程の明るい顔で船唄を歌ひながら揚網を始めてゐる。何千尾といふ魚がデッキの上でピン／＼はねてゐる。彼等は何でもない毎日の日課を何んでもない顔でやつてゐるのだ。私にとつては唯立つてゐることすらが精一杯の努力だのに。

ソ聯快速艇

七月×日

船が小さくて汚ないし、無線も持つてゐないから内地に歸るにはもう二三日待つて大きい船に乘つたらとすゝめられて一寸その氣にも成つたが、その二三日がどうも當にならないし、こゝから千島まで百二十浬大した事もあるまいと腹を決めて便乘を頼むことにした。百噸餘の油槽船だ。

晝までには來るといふのでおそくとも明日の晩には久し振りに土を踏めるんだと樂しい氣持で朝のうちにすつかり荷仕度も整へ一時頃まで待つたが來ない。三時四時と六時になつたが、影も形も見えない。晩飯もそこ／＼にしてブリッヂに昇つて目を皿の様にして待つたが、獨航船も出拂つた海はたゞ徒らに淡々と靜まつてゐる。

カムチャッカの山にかたむきかけた夕陽を受けて無數の鷗が洗場から流れる魚の臓物にむらがつて騒やかに今日の日を終らうとしてゐる。海の上の悠長さには大分慣されて來たが、上陸するといふ明日の期待が大きかつただけに流石に胸がおさまらない。もう今からでは船が來ても明朝まで出帆は出來ないと宣告されて着のみ着のまゝベッドに體を投込む。

七月×日

ところりとまどろんだ所を呼び起される。昨夜おそく入つた油槽船がやがて出帆するから準備をしてくれといふ。飛び起きる。準備もなにもない。昨日から準備してゐるのだ。時計を見ると、午前零時半、月明りの眞夜中、當直の人に見送られて出帆する。百噸といふから獨航船よりずつと廣いだらうと期待したが容積は大きくても内容は同じだ。特別に空いたベッドも無い。船の人は氣の毒がるが、こちらはもう驚かない。當番舵手の空いてゐるベットにもぐり込んで眠る。

朝ブリッヂに出て見ると幸ひに濃霧は無い。このまゝ突つ走しれば今日の午後は北千島占守島沖にかゝれる。風は相當強くて船首にぶつつかる波は勇壯に白銀の飛沫を上げて甲板を洗ふ。

ふとブリッヂに降りると船長と舵手が緊張して何か話し合つてゐる。話しに割込んでみるとソ聯快速艇に追ひかけられてゐるらしいといふ。早速望遠鏡を借りて沖を眺めてみる。オペラグラスのやうなものでハツキリ見えないがカムチャッカの陸地近くを灰色がかつた白い船が本船と平行に進んでくる。

〝こゝは陸地から十浬以上も離れてゐるから何も恐れることはないでせう〟

〝いや向ふは快速を利してこちらを沖の方から陸地へ追ひ込んで、三浬以内の領海に入つたといつて捕へるんです〟

〝追ひ込まれても逃げなければいゝぢやありませんか〟

〝大砲を持つて脅かしますからね―〟

緊張した空氣は既に全船を覆ふてゐる。

〝本船の進路へ向きをかへました〟

と、見張りがどなつた。

船は直ちに進路を沖に向け直した。全速力！

しかし全速力といつてもこちらはわづか七浬以上を出ないのに向ふはこの二倍以上の速力があるのだ而もこの船には無電はない。あと三時間も走れば千島沖だがどうなることだらうと、かたづをのんで沖を見、陸を見するうち、彼方から濃霧がやつてきた。

〝あの濃霧に本船が突込んだらすぐ南西に方向を變へろ〟

一分、二分、向ふの船が濃霧で見えなくなつたと思ふと、本船も濃霧の中に突込んだ。もう何にも見えない。

危機一髪、方向を轉じて南へ／＼。

七月×日

昨夜おそく北千島幌莚擂鉢灣に投錨。あの快速艇はどうしたらう等と思ひながら甲板に出て迎へのランチを待つ。

擂鉢山が見える。

ランチが來た。棧橋に着いた。ランチから勇躍棧橋に飛び移る。棧橋が盡きると足に砂がサク／＼と當る。一ケ月振りの上陸だ。緑の草が風にさや／＼とゆれるのがなつかしく胸を打つ。昨日の快速艇の事ももう遠い昔のやうな氣がする。

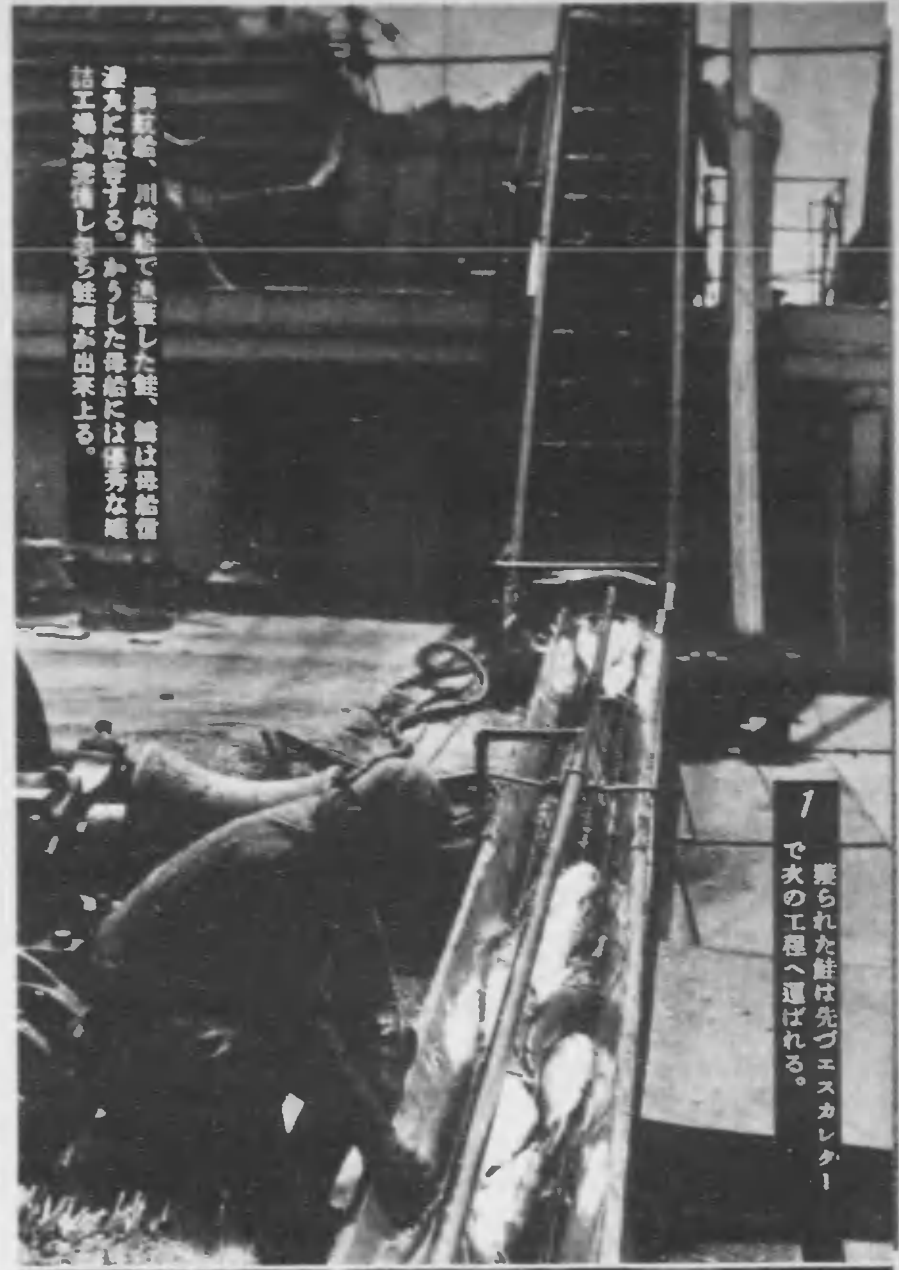
（カメラマンS・M生）

北千島の突端からカムチャッカを望む

断乎と守ろ北洋の権益

鮭罐と新巻

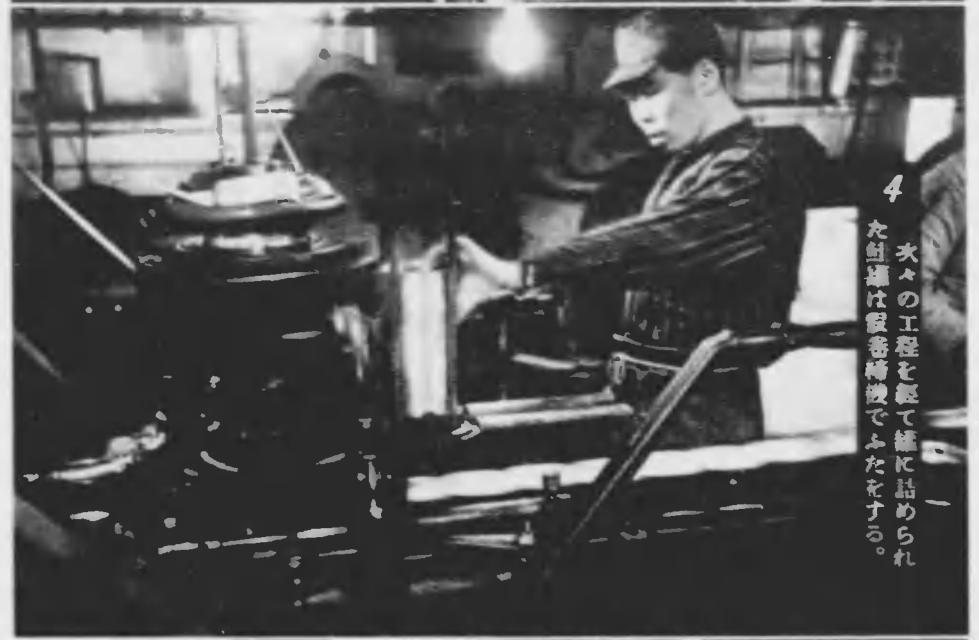
獨航船、川崎船で漁獲した鮭、鱒は母船信濃丸に收容する。かうした母船には優秀な罐詰工場が完備し忽ち鮭罐が出來上る。



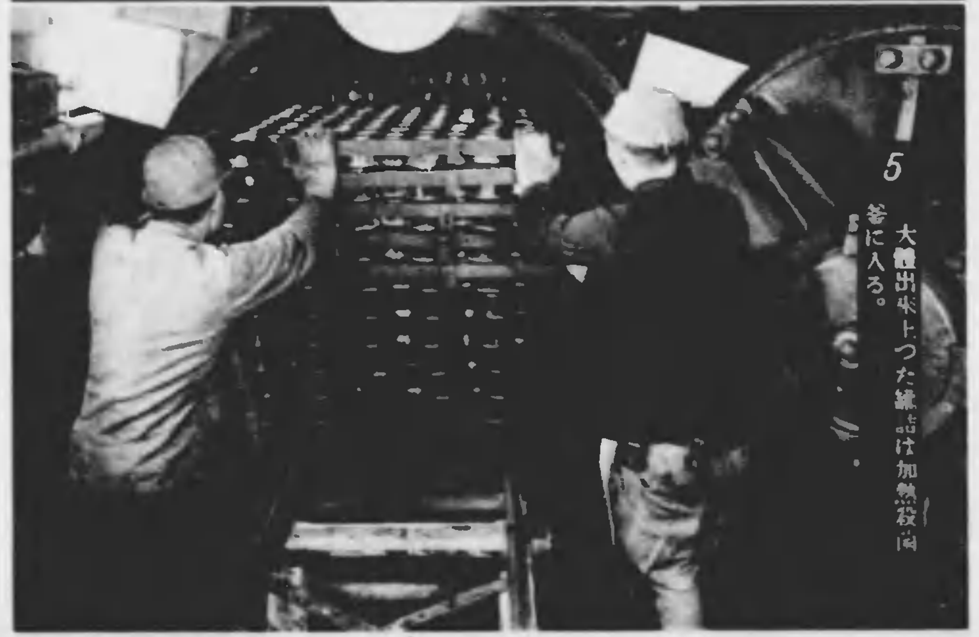
1 獲られた鮭は先づエスカレーターで次の工程へ運ばれる。

2 ここは鮭の断頭室である。

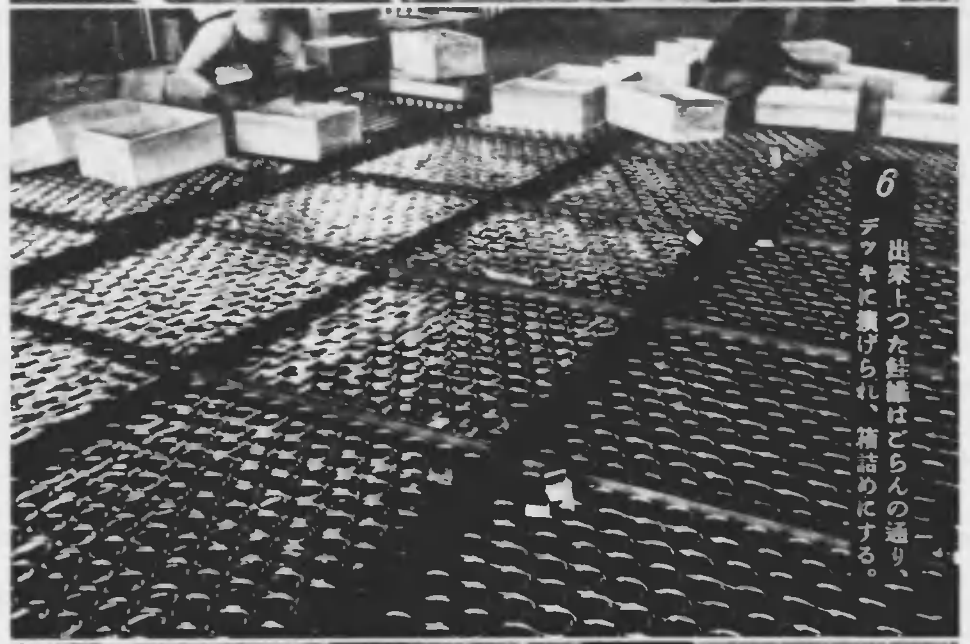
3 頭、尻尾を切られ、腹を割かれた魚はきれいに掃除される。



4 次々の工程を經て罐に詰められた鮭罐は自動捲締機でふたをする。



5 大體出來上つた罐詰は加熱殺菌釜に入る。



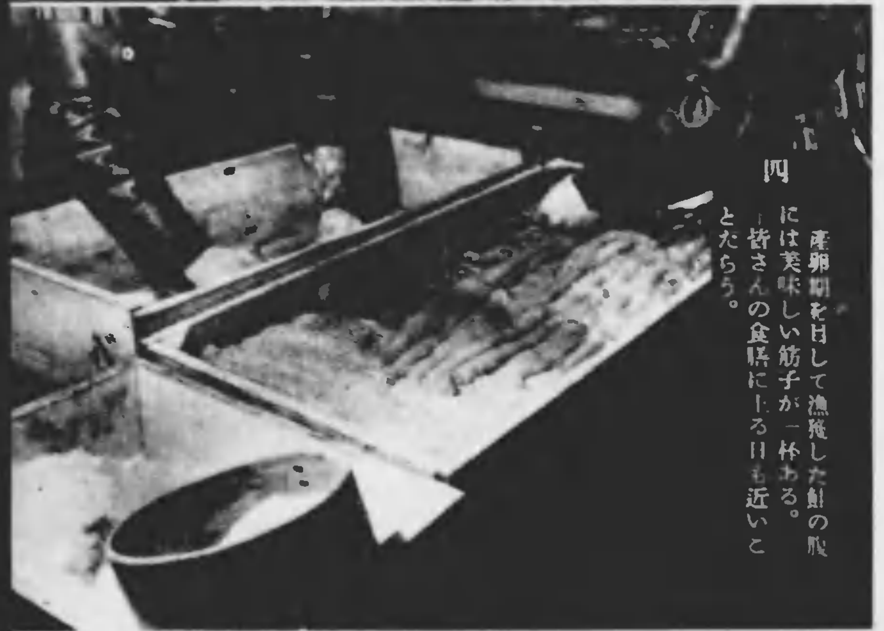
6 出來上つた鮭罐はごらんの通り、デッキに積上げられ、箱詰めにする。

7 鹽加減はどうだらうか、不良品はないだらうかといろ〱吟味する。

一 罐詰とゝもに大衆に親しみのある新巻、改良等は漁夫の分業で行はれる。——鰓をとる者、腹を割く者。

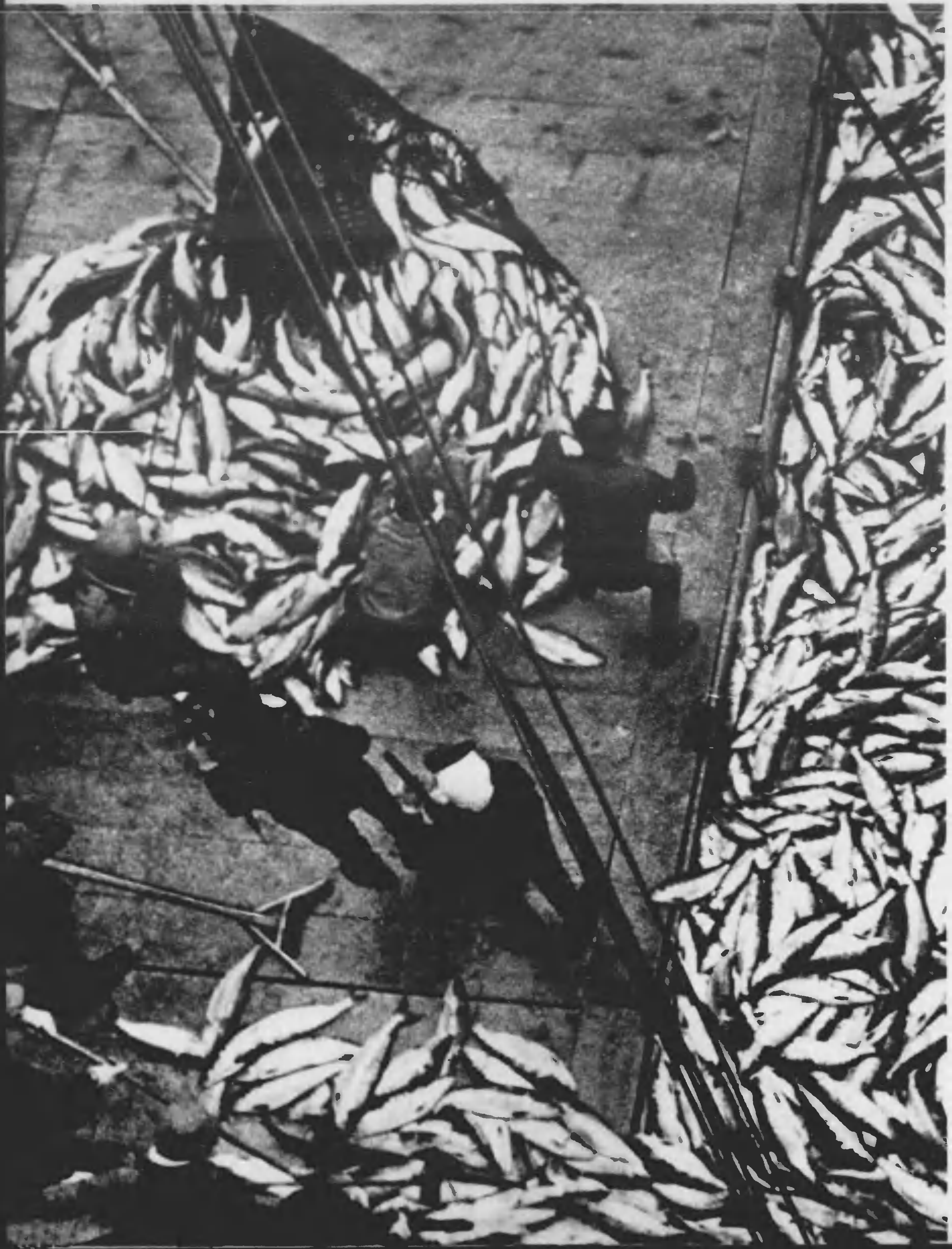
二、鹽をふる前に完全な水洗ひをする。

三 鹽にまぶした鮭は行儀よく積上げられる。



四 産卵期を目して漁獲した鮭の腹には美味しい筋子が一杯ある。皆さんの食膳にのる日も近いことだらう。

船、船、船、母船目さして大漁の獨航船が歸つてくる。



鮭、鮭、鮭、躍る銀鱗に北洋の夕日が映える。

撮影　內閣情報部

斷乎と守る北洋の權益

⇨ カムチャッカは晝が長く夜は非常に短かい。午前二時（日本時間午前零時半）になると夜は白み、午後十一時（同午後九時半）頃やうやく夜が訪れる。

夕日落ちるカムチャッカの島影に若い雜夫たちは故郷を憶ひ、陸へ上りたい衝動にかられる。陸を離れて海に三ケ月つい目の先に陸は見えても上陸は出來ないばかりか寄港することすら出來ない若人の郷愁は夕日のやうに赤く燃えひろがる。

⇦ 鮭、鱒の南下を追つて漁船も南下する。母船に從ふ獨航船は二百米間隔で靜かな海洋を進む。

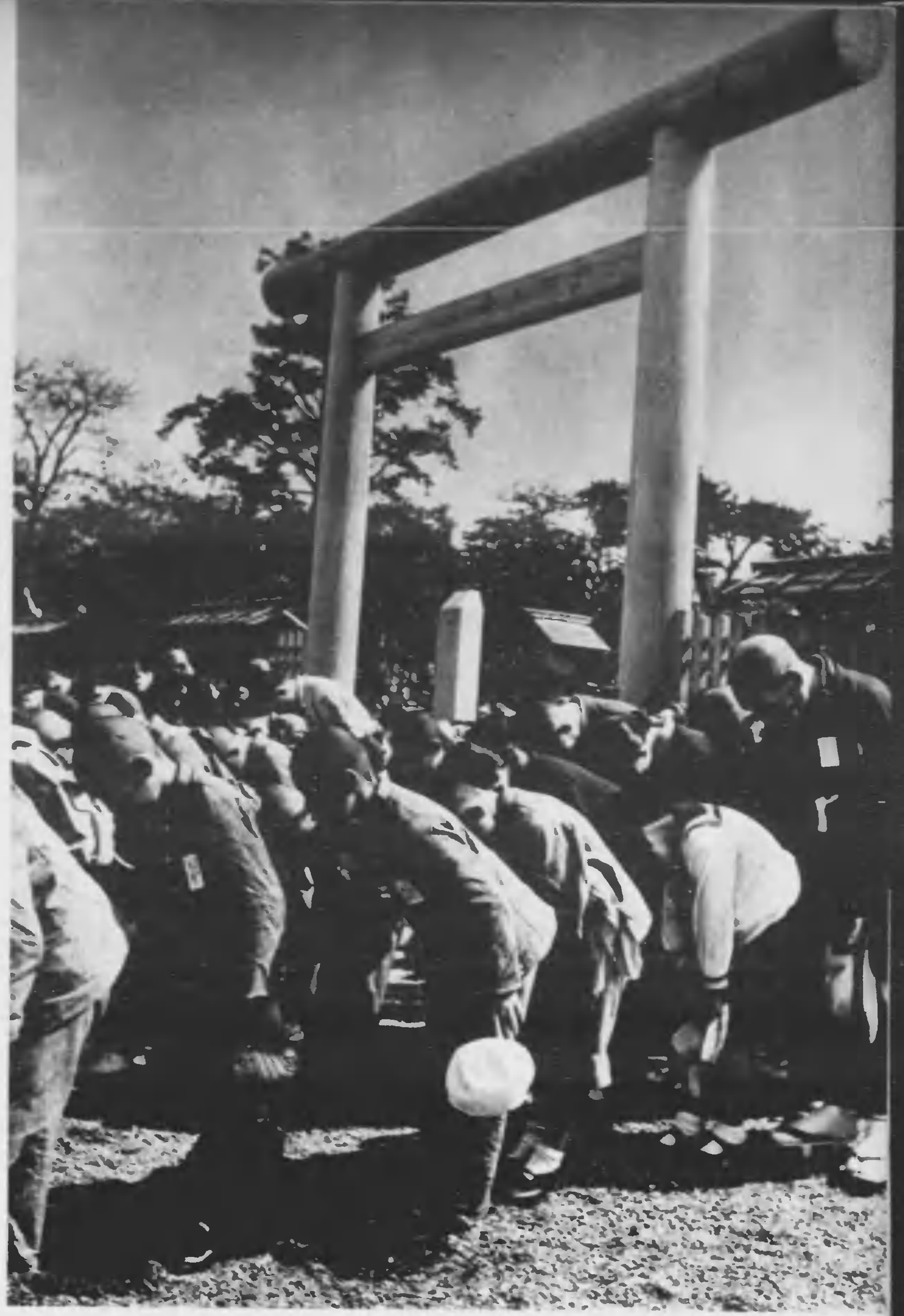
⇨ 昔とつた杵柄、さゝやかながらも散髮道具を一揃ひ並べた天晴れ元理髮氏の腕前は如何。「いたくねえなあ」「あたり前よ、これでも年期を入れた本職さまだ」和やかな會話は海上へ消えてゆく。（下右）

⇨ おい來たぞ、俺にも來たぞ、はしやぐ漁夫の手には懐しい郷里の便りがある。「喜んで下さい。あなたはお父さんになりました。丸々と肥えたお父さんそつくりの男の子です」若い父ははつかしさうに微笑む。

⇨ 船員のなかにはカメラを操るものもゐる。仕事合間の寸暇を得ては達者な姿を郷里の父に母に妻に知らせようと漁夫、雜夫たちは撮影をせがむ。

⇩ 「アラ、エッサッサア――」どぜう掬ひに興ずる漁夫も俄か仕込みの粋な演藝師も、一つの漁區を切上げる一くぎりの慰安に全てを忘れて興ずる。

九段の父に會ふ



⇧ 拜殿前に整列した遺兒とその附添ひの人たちは最敬禮の聲に肅然と頭を垂れる。片時も忘れなかつた父、會ひたくてたまらなかつたお父さんはいまそこにゐる。

「お父さん！　僕です」

「お父さま！　あたしよ」

たまりかねた心に叫ぶたゞ一言、小さい胸に熱いものがぐつと衝きあげる。

⇦ この朝七時、畏くも　皇后陛下から遺兒一同に賜つた御菓子の傳達式が軍人會館で行はれ、遺兒總代新潟縣の上澤準一君がこれを御受けしたが、一同　陛下の御仁慈に感泣した。

⇨ 全國津々浦々から、或は學校の先生に連れられ祖父に附添はれ、或は母の寫眞をしつかと胸に抱いて、遺兒の代表は夫々父に會へる嬉しさに胸高鳴らせつゝ鐵路はる〲東京驛に、上野驛に、又新宿驛に到着した

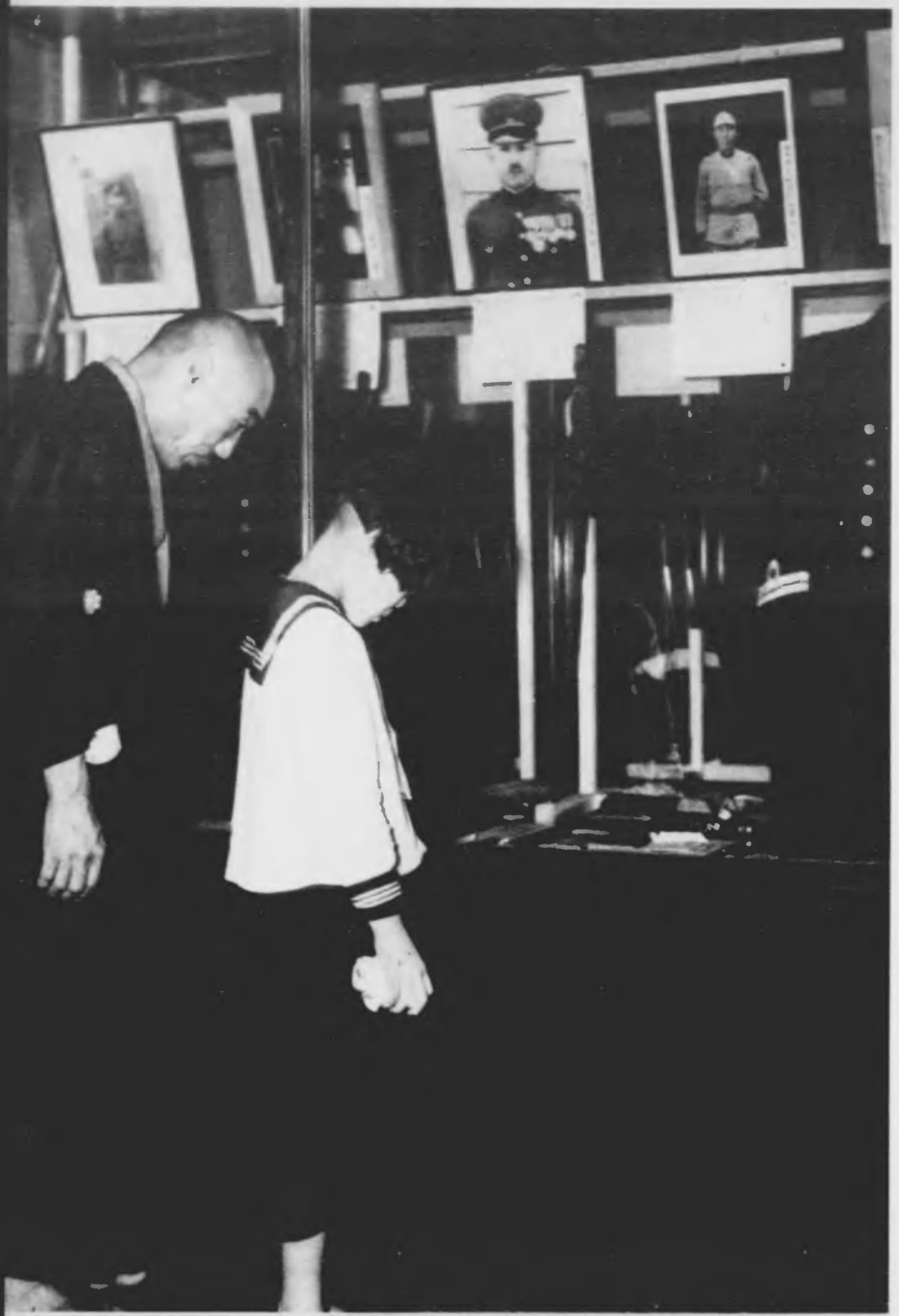
⇨ 參拜の遺兒の列が、ザク〲と玉砂利をふみしめて境內を進むとき兩側には幾多の人たちが堵列してこれを迎へた。父を有つわが子に思ひ比べていぢらしい遺兒の姿に思はず淚する母もある。

⇧ 特に昇殿を許された各府縣男女一名宛の代表は本殿を目前に拜して心をこめた玉串を捧げ、感激に瞳をうるませつゝ拜殿を退いた。

⇦ 遊就館支那事變記念室の勇士遺品陳列室にぢつと淚をうかべていつまでも去りやらぬ老人と少女、參拜を終へて附添ひの母や祖父と共にこゝに案內された遺兒はありし日の父の面影、血潮に染む數々の遺品を前にして胸せまる思ひをどうすることも出來なかつた。

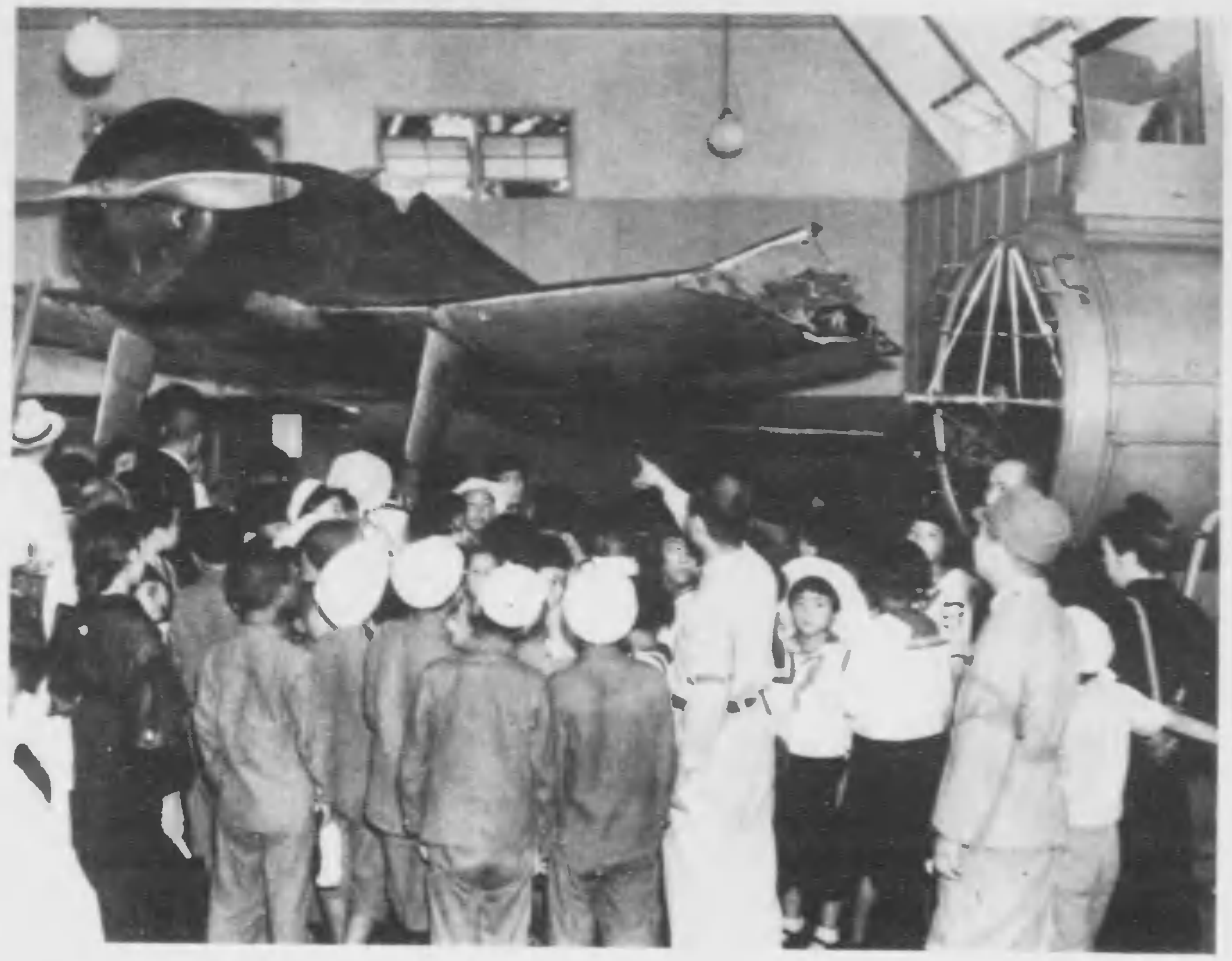
八月六日、恩賜財團軍人援護會に招かれて全國津々浦々から上京した戰歿者遺兒の代表尋常六年在學の男女兒千三百二十四名は、護國の英靈神鎭まる靖國神社に參拜、今は亡き父の靈と森嚴の社頭に相見えた。お父さんに會ひたければ靖國神社へおいで——といひ遺して輝かしい武勳と共に大陸の戰線に華と散つたわが父に、遺された愛兒はいまぞ晴れて再會の願ひが叶へられ、心ゆくまで言葉なき對面の感激に浸つたのであつた。

撮影　內閣情報部



九段の父に會ふ

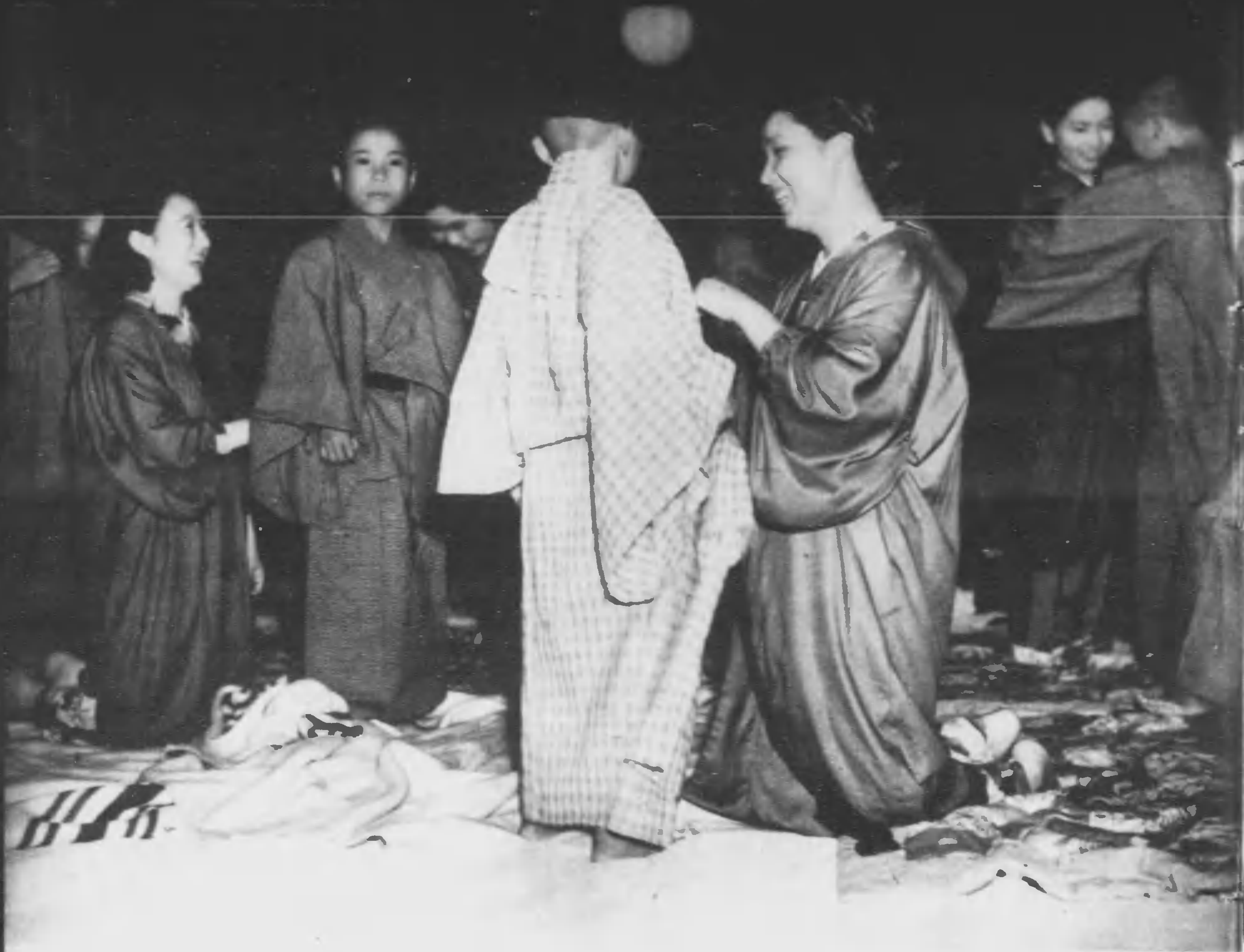
「これは敵機に體當りを食はせ、片翼で基地に歸つた有名な樫村機です」海軍館に陳列される様々の軍事記念品を遺兒達は父の武勲を思ひうかべながら見學する ⇨



遺兒たちの分宿した軍人會館及び附近の旅館では新らしい浴衣も作り、下駄も揃へ、溫かい心づくしが彼等を待つてゐた。

「あら、それぢや裏返しですよ」

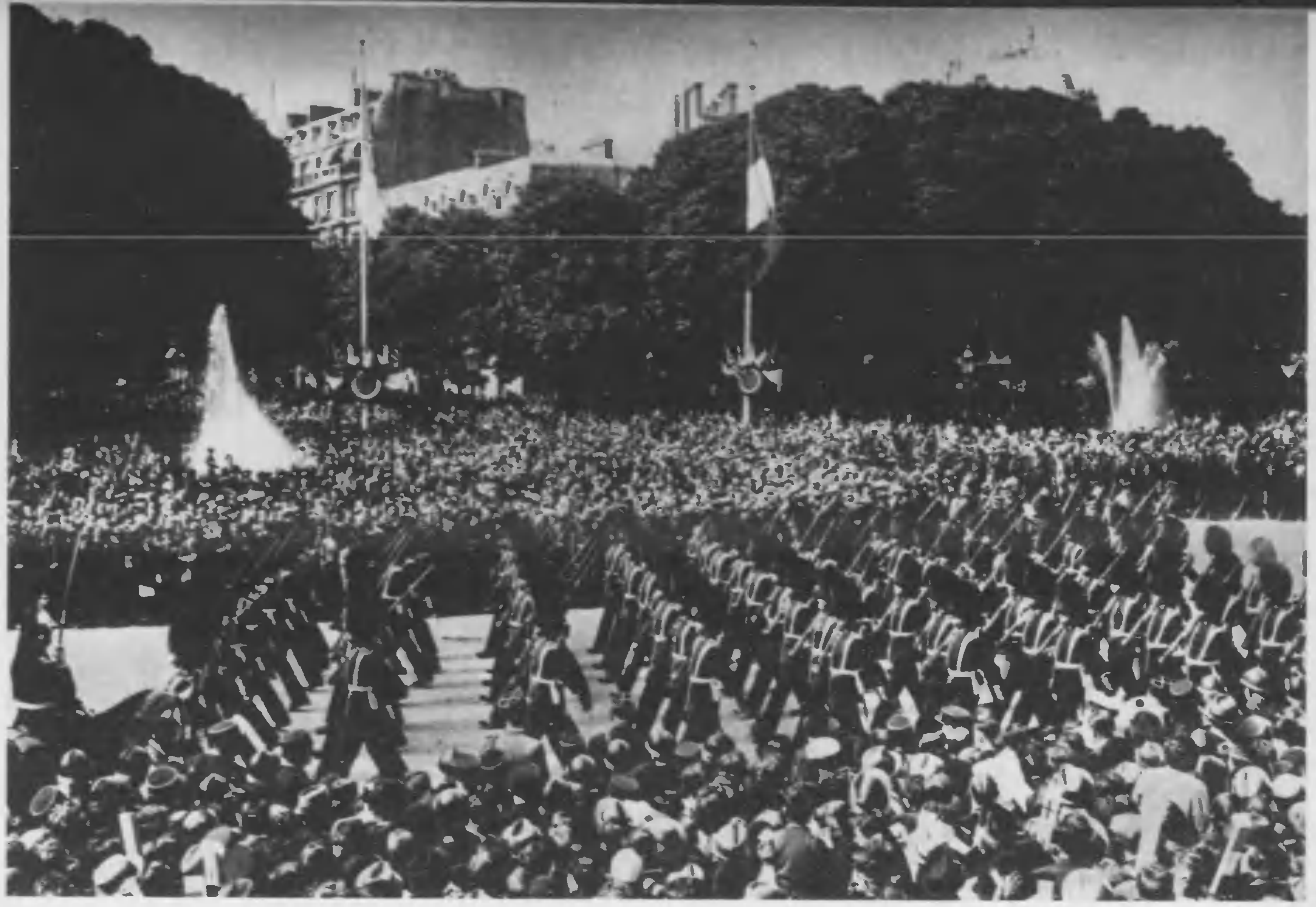
お母さん代りに何かとやさしく身の廻りの世話をしてくれる宿泊係のお姉さんたちの親切が、長旅に疲れ、張りつめた幼い心に沁みるやうに感じられる。 ⇦



遊就館の見學を終へた遺兒たちは軍人援護會のおちさんから辨當をもらひ、更にバスで明治神宮に參拜、終つて涼しい神苑の木蔭でお姉さんたちからお茶の接待をうけながら今は爽かな氣持で握飯を頰張る。 ⬂ ⇩

忘れることの出來ないお父さんとの對面も終へ、市內見學も濟んだ。方々から心づくしのお土產物をもらつて遺兒たちの心ははや鄕里に待つ母、兄妹の許に急ぐ。 ⬃

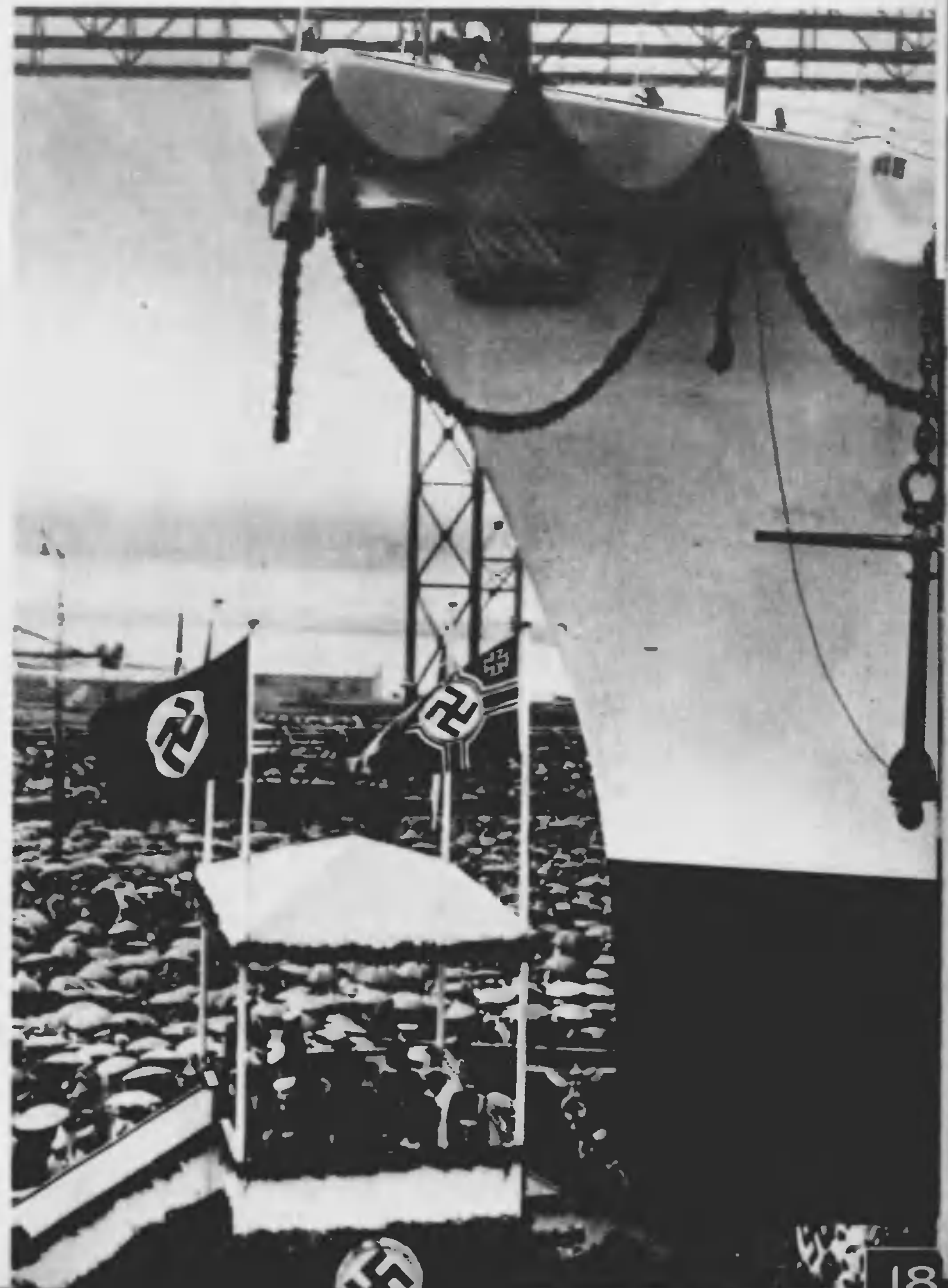
海外通信



⇧

巴里祭に英國兵參加

巴里祭で知られた七月十四日のフランス革命記念日に、パリでは空前の民主主義祭が行はれたが、これを機會にイギリス陸軍五百名もパリを訪問、佛陸軍と共に合同示威分列式を擧行した。寫眞は、パリ市民歡呼の裡に行進する英擲彈兵。



⇨

ドイツ新鋭巡洋戰艦
「リュッツオフ號」進水す

ブレーメン軍港で建造中であつたドイツ海軍の新鋭巡洋戰艦『リュッツオフ號』の進水式は七月一日レーダー元帥臨席の下に行はれ元帥の銀斧一閃、巨體は音もなく見事進水した。寫眞はレーダー元帥の祝辭朗讀。

寫眞協會

⇧

ポーランドの收穫祭

七月はじめからポーランドでは小麥の收穫が始まる。刈りとられた黄金色の收穫物を山とつんで、今日は農民が地主から小作代をもらふスパラ地方の收穫祭。モシキー大統領（左端）もこれに出席、ポーランド田園色ゆたかな晴衣をまとふ農夫たちと喜びをともにした。

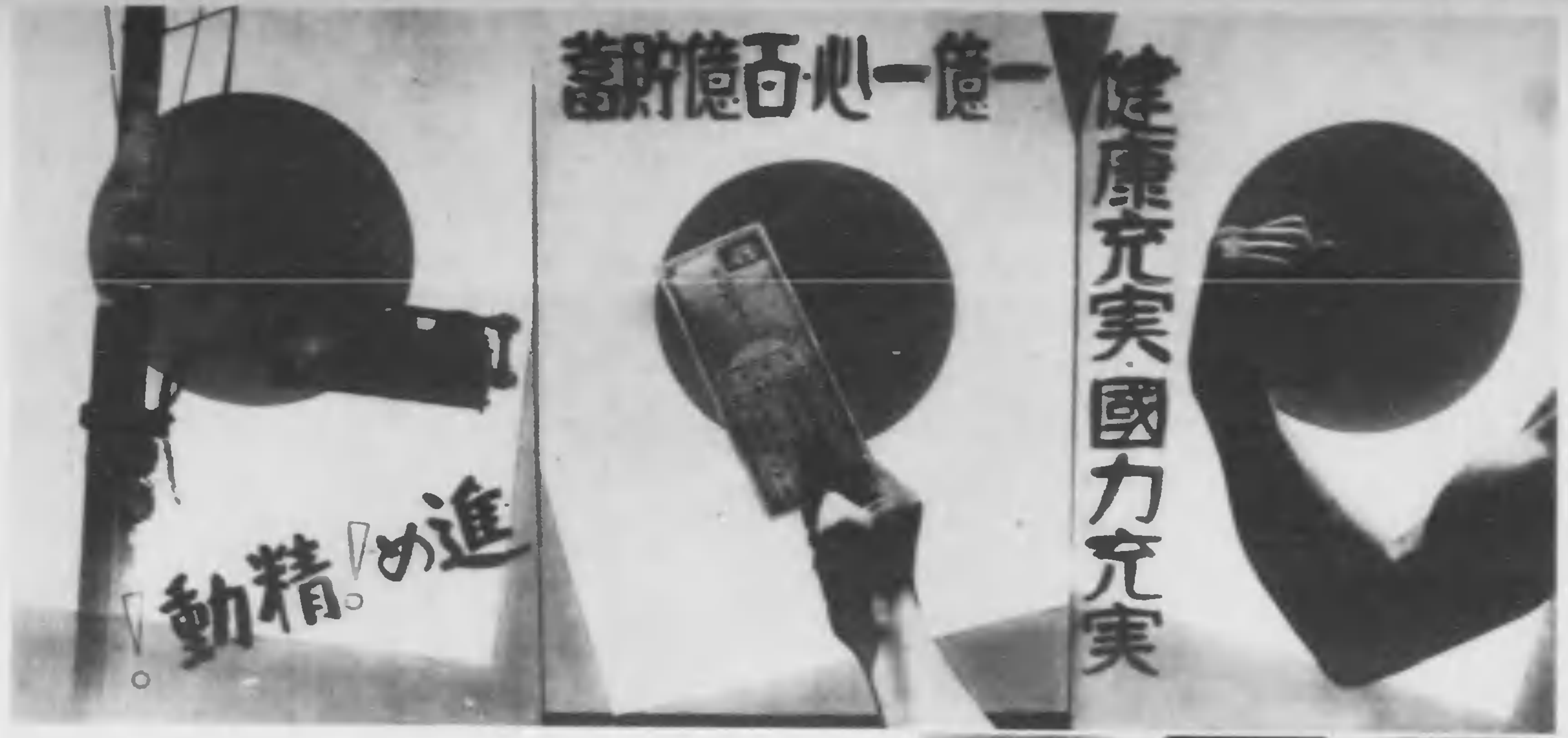
⇦

自轉車式飛行機現はる

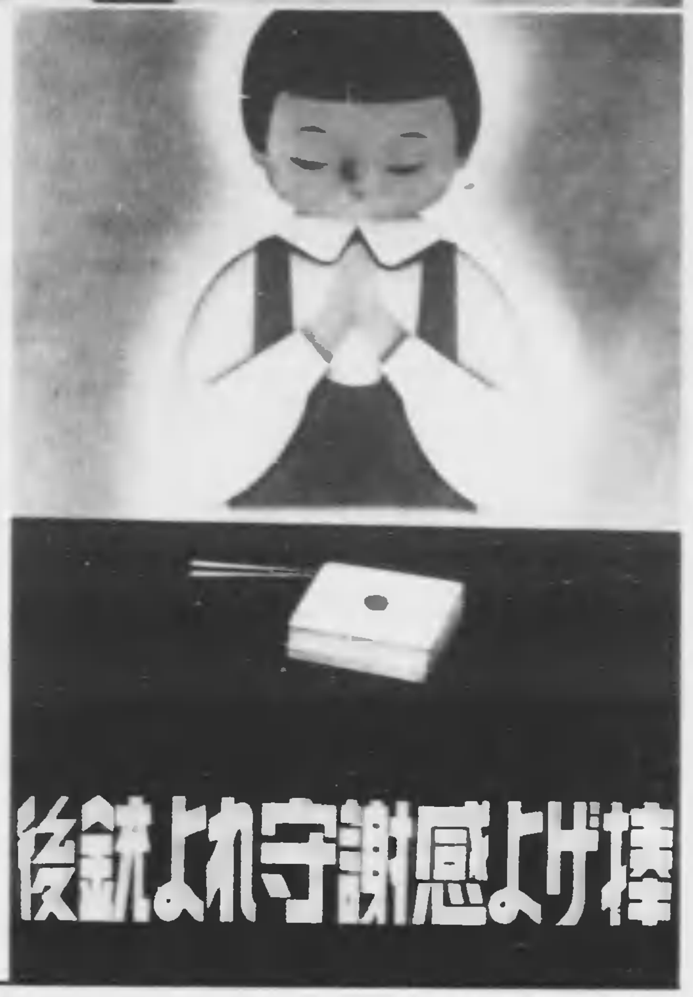
ドイツ土木省の建築技師マスコウ氏は既に二十五年間自轉車式飛行機の研究に沒頭してゐたが、このほど新式の自轉車式飛行機を完成した。

同機は翼長十四メートル、重量九十キロ、アルミニューム合金製の操縦席の下部にはペダルがあり、操縦者がこれを自轉車式に踏めば滑走し、飛翔する仕掛けになつてゐる。

・時局ポスター懸賞募集入選者發表・



甲種一等


捧げよ感謝　守れよ銃後
乙種一等

甲種（三枚一組シリーズ物）
一等　東京市葛飾區本田道江町九一一　笠原章太郎
二等　大阪市東成區南中本町二ノ二五　梁岡方　朏泰藏
三等　東京市目黒區上目黒七ノ一、一一八　大智浩
佳作　東京市牛込區納戸町六　加藤方　大塚均
　　　東京市丸ノ内郵船ビル五四九號　水谷圖案社　水谷仲吉
　　　大阪市天王寺區上本町九ノ五三　ワカバ商業美術研究所内　松木藤造
　　　兵庫縣川邊郡長尾村上中筋三二　清水芳郎
　　　熊本市山崎町八　永田績

乙種（一枚單獨ノモノ）
一等　東京市澁谷區代々木初臺七二二　花田方　西澤大六
二等　東京市京橋區京橋二ノ一一　京二館三三號　稲垣知雄
三等　東京市杉並區西高井戸一ノ一三九　三戸森宙平
佳作　東京市芝區南佐久間町一ノ五三　土屋華紅
　　　東京市世田ヶ谷區大原町一、一四三　藤澤方　小山泰治
　　　大阪市天王寺區上本町九ノ五三　ワカバ商業美術研究所内　黒田矩彰
　　　廣島市翠町翠光園通り　松本輝夫
　　　熊本市山崎町八　永田績

尙優秀作品は八月十六日より八月二十七日迄東京上野松坂屋に於て開かれる「新時代の心構へ時局ポスター展覧會」に陳列してあります。

主催　國民精神總動員　ポスター作家聯盟
後援　内閣情報部　國民精神總動員中央聯盟

復習室

本號からあなたは何を學んだでせうか？ さあ、復習をやりませう。

1　日露漁業條約暫定協定はいつ迄有效ですか？……（4頁）
2　七月一日ブレーメン軍港で進水したドイツの軍艦の名は？……（18頁）
3　北洋漁業はソ聯領海内だけで行はれてゐますか？……（4頁）
4　八月六日靖國神社に參拜した遺兒の代表は尋常何年生ですか？……（15頁）
5　フランスの革命記念日はいつですか？……（18頁）
6　日本海々戰で有名な信濃丸は今何になつてゐますか？……（6頁）
7　皆さんの食膳に上る筋子は何の卵ですか？……（9頁）
8　北洋のわが漁獲物の輸出額は一年どの位ですか？……（4頁）
9　カムチャッカ時間と日本時間の時差は？……（12頁）
10　ポーランドの大統領の名は？……（19頁）

右の問題、一問十點としてあなたは何點でせう。

★表紙　年産一億圓の漁獲高をあげる北洋の漁場は獲れども盡きぬ寶庫である。ホーイ、ホーイ、今日も大漁だ、よいやこらさ……北洋の濃霧と寒風を衝いて鮭と闘ふ漁夫のかけ聲は甘く、余韻は長い。聲はすれども姿は見えぬ濃霧の唄聲は陰鬱な北洋に咲く叙情詩である。　撮影　内閣情報部

寫眞週報（禁轉載）
昭和十四年八月十六日印刷發行
編輯者　東京市麹町區永田町　内閣總理大臣官舎内　内閣情報部
印刷發行者　東京市麹町區大手町　内閣印刷局

定價
一部十錢
半ケ年（前金）二圓四十錢
一ケ年（前金）四圓八十錢
・郵税不要ー（外國郵便に依る地域は一ケ年九圓十二錢）
半ケ年分未滿配送御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を添へ御申込み下さい

申込所
内閣印刷局發行課
電話丸ノ内(23)三五一一ー九
振替東京一九〇〇〇
全國各地官報販賣所
東都書籍株式會社
各書店・驛賣店
各新聞販賣店
寫眞材料店

總代理店　株式會社　玉置商店

過勞は危險！

多忙な人はゼヒ毎日二球！

仕事…仕事…仕事で疲勞が重なると過勞になる。過勞が續くと健康の低下は免れません。食慾が減り元氣が衰へ病氣になり易くなり、特に結核や肋膜炎が起り勝ちです。

「理研ヴィタミン」は強力製品なので、毎日二球づゝで充分、二球一度に召上るも、又朝夕一球づゝ二度に召上るのもご隨意です。

「理研ヴィタミン」は有名な理化學研究所の製品で、ヴィタミンAとDの榮養劑――多忙な人達の健康増進劑として好評です。

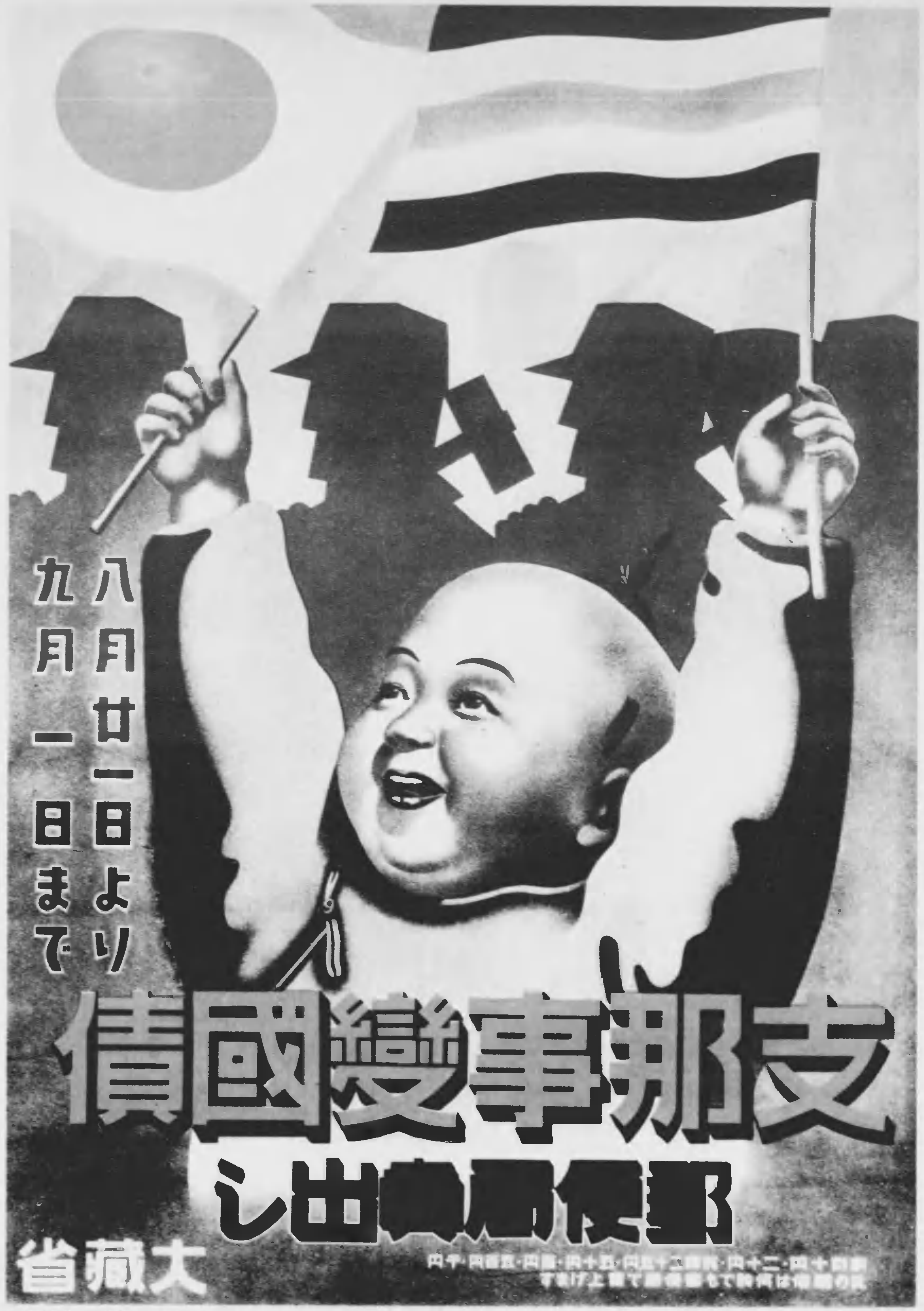
ヴィタミンAとDは、榮養をよくし新陳代謝をよくして、疲勞の回復を早くします。抵抗力を強化して體力をつけ病氣を豫防しますか、特に呼吸器系―例へば風邪や結核、肋膜炎に罹らなくなります。ヴィタミンAは又、體力を強める作用がありますので、多忙な人には一層理想的な榮養であります。

魚油のまゝの肝油と違つて「理研ヴィタミン」は純粹製品なので安心して運用できます。のみよいグロビュール球入りで、一球に肝油二十五個分―七七〇〇國際單位―のヴィタミンAを正確に含有して居ります。毎日二球づゝ服用すれば充分です。

理研の榮養劑
理研ヴィタミン

五〇球　二圓　一〇〇球　五圓　（小粒製品一圓三〇錢より）　藥店にあり

寫眞週報 昭和十三年三月十二日 第三種郵便物認可 昭和十四年八月十六日發行（毎週一回水曜日發行） 第七十八號


八月廿一日より
九月一日まで
支那事變國債
郵便局賣出し
額面十円・二十円・[illegible]二十五円・五十円・百円・五百円・千円
此の國債は何時でも郵便局で買上げます
大藏省

（本書の大さに同じ・A4版週報の倍判）

內閣印刷局印刷發行